

十訓抄

自八  
至十



十訓抄下

第八可堪忍于諸事也 第九可停懇淨事  
第十可康疾也為事



第八可堪忍于諸事也

或人云法の事と思ひ忍らんはすべからず律より一人  
の心中に法のありき事とのまふ是を不忍いある  
まじし事なり人の所法とよまふの言ありこ  
まを不忍いせよまらるるへりす中も身あき事  
を忍んで道とまひるを忍んで君に仕つゝ家と  
おこし所とまらるるをすまひるを忍んで家と  
まらるるもかたし物にまらるるを忍んで大なるもの



とをりてると五の徳あり入と云五戒十善なりと名付  
くよらつ川此罪と失る法とせり一切の罪とおうすと  
物と名えぬうとす可也此法もや淨信佛部等  
一十條起請勇一辰難を不計心事一思思念不執實  
志とありてかこもハ聖賢と稱も七賢位の中も志法  
位をさくふ及びの中も志辱波羅奢九稱一十地  
もハ堪忍地を号し一證果と云無生志を云釋尊  
とハ慈忍を教けたり羅睺羅尊者ハ志辱第一取  
此ゆるや廣ハ妙の直りとく忍と云文字と事と守  
りしきり入るるりあつたあま大軒とせきり化形  
草まててもあつたなりと名えハ草をくハすまらさ  
とと中にも雪ふもある草と名けては忍辱草と

云文ありとは靈草は同名と通ぬる瑞草と云名とあ  
まハいりももうらあり名の類ハあつたす法師品の  
加刀杖乃不念佛故應志の文と名草もとせて寂念  
りある

わが今 此き物の意打雨と名えぬハ世とわらふ也  
不輕品の心を江に言ふ詩も

真如珠と塵散禮 忍辱林中在法縁

五部中將の存りてあまんとらめる界の河とわらふ  
圓滑肉肉家さつてのさつたかきつけりあつたゆ  
花園たたた草はらとらへ付て心の色とわらふ  
沙草むもやとと名えりつてとつけとも思はす  
かといふ草のあま

○大納言行成はいままゝ融と人をも知りしけり。實方  
中納言の如く憤るもあんな融はよき事と云ふ事もなく  
行成の爵と打落なく小庭はなほあすすてしかり。行成  
はもあつちすしてこののちと目と云ふく。爵取て事れ  
とて爵してまわりの刀よりわづらひ貫ぬくひん  
ふはくわひく。飛ちりく。いりなり事。よそやん  
鳥ふやう程の礼。爵は取らる事。よそやん。ゆり  
其れと兼りてはの事。よやゆり。いん。とらり。く  
いん。とらり。實方と云ふけり。よけ。よき。事。り。打。し。も  
とらり。とらり。とらり。ゆ。た。ん。て。行。成。は。い。ま。ま。も。若。也。  
かくと云ふ。わ。し。き。心。あ。い。ひ。く。し。て。思。ひ。ら。り。く。し。て  
共き。ひ。就。人。は。い。わ。る。ま。ら。し。け。り。よ。ま。あ。の。人。と。誠。と

ねきん。よ。り。實。方。と。い。中。納。言。と。り。て。奇。枕。ん。と。く  
あ。れ。と。て。陰。奥。圖。よ。な。り。つ。つ。い。れ。け。る。や。そ。か  
あ。と。と。て。共。よ。り。實。方。就。人。頭。ふ。あ。う。て。や。ま。よ  
け。り。と。根。よ。て。枕。と。ま。ら。し。く。舊。も。成。と。融。と。の。小。臺  
盤。よ。あ。て。臺。盤。と。く。ひ。け。り。也。人。云。り。一。人。不。忠  
よ。り。く。兼。途。と。共。ひ。一。人。の。忠。信。す。り。よ。り。と。く  
應。む。と。あ。つ。ち。ま。と。く。わ。り

公教の相國實行の子

○三條内大臣ゆりては客人まうてさきをりけり。隣

たもあつち通事ゆり

よ。公。重。少。將。の。わ。ら。ま。を。り。け。り。此。殿。ゆ。り。物。と。云  
わ。ら。り。と。く。大。つ。わ。て。う。て。打。け。り。侍。の。根。子。と。い。は。ひ  
と。と。く。打。を。り。け。り。八。客。人。字。文。是。と。け。り。よ。人  
と。と。て。ま。う。打。を。り。同。也。此。者。れ。八。隣。の。女。わ。り。と。り

あき事とさうめく打ちと中もれいさうらあきと客  
人よ因へりつせほくあやすらりめとあつらつておと  
引入給あり又ほよおとらつたれハ階くそころり  
打ちここれのりおとらめり一送りすおれ一と  
おとさしと箱らうくこもあれこつ一とさか  
らりし一人也其客人の給もり也これ乃世よハ  
不免おりするそやうとておれまう三葉四葉に此敵ハ下よ  
道心のありけりもや右大臣能房三男東抄古納言雅俊々のい  
あく腹あつてつらやねくもとらひつめくおと  
ておりけりもハおれはきりける人也源中納言  
③高湯院の姫君とつと香ね院のいさすめ長福  
長宿女門流のい腹也此家のいさすめ共い先とせり長子也

こらありよりねくかられせねける家の内乃以款  
こそとくむちありけるいさこの款人々系集  
さうけるいさすのいさ柳も人のなく家みまさり  
あり中納言家成子珍考古納言いさくあつ人の時系くまをり  
ありあつて感とていさ一と半くねくいさねり  
物を款とも信とらあまもしてあまらけりかす  
あるまも也高湯院のい腹ハあまらつた男をそくて  
男女さしひわさる給けり箱とハすてりもねしか  
つとてよつぬさすまにあさつたれもあつて首のい  
だん方ハいささつたれハとつたれ  
皇の治麻法子俗名範清  
④西行法師 胃ねつけり耐けく系ありむすめ  
とつたりねりけるり重く想ひて張つたつたり

清水流り水魚の者たらうしく遊あつてけりふい  
かりれく心づくすのちちりしけりふい  
まのりて身よ物とさうやきもれハ心あくぬ人ハ何  
た思われす西住法師いさる男とて深江無事射  
とてちちりふ目とん命て此事とて改まら  
きて人よもあてせすけりけり多く柳の葉あもか  
りてわさるるさうさうさう心づるさう西住法師  
人よ流りけり是木根とくられた流物と堪忍ふ  
ら類也心づるさうあめぬ人ハ何とてさうか  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ

思ひぬくさあつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ  
あつてぬあやのあつたのめをさう物類をさ

尼舎師尹母空方々

九条殿中四院母

小一条

中園白道隆子

右府敦實親王子

伊周公

伊周公  
名第在。流罪さうさうさうさう  
事あつて流りさうさうさう  
委世絶ゆる

皇明女母貞信公女天曆女氏

齊宮女氏 長母也云云 後修く久しくあはせ給は

さるにけり 江戸の次ありて内より

河くもあれ 編みのせれをより なる朝より人の徳心は  
西遊事

いそぐにいとまうまといふに秋のまの卯に信を  
是ハ家男依ふあはれ 福を物ねさすも ねくせきん  
心や 后をハ秋のまより 又編葉をハつかしてまよ  
思ふをくまきりてよ中より 申文の心也 此所をハ后を  
のそまを 徳家あめりも 世人もあれは けくは 徳集  
まのそくれは けりて 此ハ 實の物ねさすハあ  
す河くまの 西遊事 きたりともり

寛平法皇 光孝三子  
河亭子院 西恩本あまの 西遊事 河

院のん本あまの 西遊事 河 大長

西恩本一とありて 具く 事て 西遊事 其の  
事なりふ 西遊事 西遊事 西遊事 西遊事  
きく 西遊事 西遊事 西遊事 西遊事  
花のく 西遊事 西遊事 西遊事 西遊事  
ねく 西遊事 西遊事 西遊事 西遊事  
あけく 西遊事

世中れあまの 西遊事 西遊事 西遊事 西遊事  
とあまの 西遊事 西遊事 西遊事 西遊事  
あまの 西遊事 西遊事 西遊事 西遊事  
あまの 西遊事 西遊事 西遊事 西遊事  
あまの 西遊事 西遊事 西遊事 西遊事  
あまの 西遊事 西遊事 西遊事 西遊事

けららふねのこころくくひあふぬうさささいぢ  
あかされよけらねくせゆきいさして次この人の振舞  
理と云る

⑤ 大和國の男を著りむね妻とあへを病くめつじ  
さかど切くへく月法あれた此妻あねさめるさあをなく  
てさうり秋の徳法つらくくささる麻の子お枕よと  
つらくとおれ妻よせ給やと問あれ

部もあつ侍てそ人よあられくは法とて夢をばさけ  
男さうりねくめそく今おあを送るとおれ妻とすさあ  
業平中將れ高あへ通けるは御つらけねるあをねく  
て男お心のこころあふさささけらねりまやあか  
けらさうりけんねあくささくおあくこころさうりね

あふ

風もあふ汁つ白波ま回ふさうりや若うひらさりえ  
とねめけり信よささきさめくも男茶載の牛よ  
かされて此事さうりひつ外心若よけらさかん女入  
とハ佛も内心如奴及く作くさそれハ幸うは心をく  
てもあふんささささねめあひさせりのいさ

⑥ 木買は文の通さあつさささあふさうりあり  
年法の家任任てゆさうりあふとてとせとまてとあふ  
おめをささうさして別さうり共次は年買は古里れま務  
のちちへ成く起く河坂妻園の氏お妻とねりて買は  
よさささけりてねく悲く消入よけらとねん

品尚又う妻回くあさとすは任く別よけりて品尚又王の



作て成るくわしうりある時あるくつと本くむの  
し〜あ〜ん事とていひのそむ共何ん高天栴一と  
あて是よ水入よ〜まふ入つらむせよの〜とあ  
けら〜く〜のや〜と〜入〜と〜時〜知ひ〜とよ  
ら〜ちり水つとら〜入ん〜と〜高天云汝がよ縁  
つ〜事栴の水と〜せり〜同〜と〜又つとら  
帰ら〜すまんと〜まける此物流〜と〜あ〜縁た  
貪きうせとあひんす心〜と〜類也

第九 可停懸澄事

成人云人の心よあ〜ぬ事あれたとておたあひひ  
もあれあひひ〜と〜もあれ物振れ〜と〜  
也き〜ひ理道の事の相遠〜と〜約束れ皆の愛  
政あり〜と〜ゆり〜と〜あり〜と〜心永く忠ひ〜と〜  
き〜と〜ゆり〜と〜中〜と〜知〜と〜い〜と〜  
くも〜と〜ぬ〜と〜ぬ物あ〜と〜あ〜と〜  
く〜と〜あ〜と〜けり〜と〜あ〜と〜あ〜と〜  
悔〜と〜事〜と〜あ〜と〜也老子の汝終つる事ありと命と  
あ〜と〜者〜と〜天と〜あ〜と〜事〜と〜あ〜と〜知者〜と〜人〜と〜  
あ〜と〜

性信  
三條院皇子  
法持大僧正系系長志寛助右中弁時賢子  
仁和寺大印室河成就院傍正の事〜河内郡と

中けり法白川の九重に依て依長をけりし御室今度表  
賞ありハ必講くんとし約米もあれハ畏り給ひ  
思のこころ供養遂くまこと賞行りし時成て系  
於大敵の子息河内國梨よとて此賞ありとて此後者りよ  
大敵は討向の次よ今度の賞ハ少法作よと給ひ侍り  
りし兼てよとて依中給あれハ作りもやりし方ね  
くそ法眼よ成給よりり此室ハ後河内國梨よふは侍  
とありんや胸ありりて思念けりよ其自少月もそ  
りもあれハあらん若彼行よあしりり入りしこの  
あまのこもやとお母しりし礼きりふ日高ありて此  
前よあしりしけりよあやとお母しりし月も  
ゆりれきりしつらとやとお母しりし新法眼の此

依ひまよりり侍りしお母えとてつらも依りし  
色もよりり侍りし此室これくも喜よお母外れ  
と成しと親くまよあれも次この勸賞あまの謙  
つて侍りしとて好りて高相院の時ハいつ佛と思  
百者れハ世と家まよあして法御園白とまていられ  
給ありしつらとある人も

○六条御所より伊藤義光の方よ知りの事あり

ちり館九二節義光坊けあしきひありまの理  
五々れハ院よ中給たおれくうれ坊とまありん  
や思これ侍りよとまも事きれらとあれハ心と  
ねく思われ侍り院よあまの坊つらりよ困給るける  
時をくまよ世く汝り河内東國の庭給る今まてこ

美濃守隆経の右中弁頼住孫

伊藤義光の子

と言ねばは情もや思と作られぬ畏の事なけ  
 ろよ初よりせしめてお理の事な海の方へ  
 またりとせぬくやあいつらもまたお思ははとこ  
 りてはよらうせよう一に作らぬ思ひするあ  
 や一と思てとらりやゆりまはれは恐るなり  
 とか一にや一ととも事かきま一團とも目もあるい  
 ても此不不義義先は後よ余をわけきりやゆりは  
 いとあ一まよあ一す恐るるのこも一也義先は  
 多ひすの極なり心は静る者也不安思とんまふ次  
 中ふとあま大踏通つる一ともあれいりゆりまは  
 かせひく思えぬはあのもつらあふゆり一と事よ  
 あつゆやゆりのりかくもはんといゆ事よと心う

といふは一ふいふも一也理不極くいんま思ふ  
 むくむのけちめと分て定めんまも奇ゆはなぬ  
 殺の事な極とも是と思くとまを事きうぬ也と  
 作事なけれは恐る畏く海とわたりてあたり  
 家より付やまはら義先とゆゆり一と事よと  
 よひもせぬといふ一も一に殺の竹事よよひ  
 殺も一とぬらうまのこらもぬはあひと極の事  
 中一んとく事内いせゆらつる也此事理のつら  
 取らゆり一とも極く思ゆゆまてあはは是をく  
 ても事よ一と事な一うこよは是とまはたぬ  
 實不便なり此事ゆらむとせゆえつるゆりま  
 ま文と書く一とせられぬ義先畏く情のま

おくまたりかき二文字書てまておまたり共なはき  
はささくひらきまのつらある事ハおろりおれと  
七百は従事ハ何とぞん思ひます人ともぬ  
時鐘さる者のお人おとさささひおろり  
まきささるりすきハまて刑部殿随々おゆるとまて  
何くまも身とまおきさりけり是を因て付てもあ  
く思ひまらわく胸つおれく流のゆ息おく思ひ  
ろくま付てもおろくそまおへけりまきれりか  
まらとまらまのりてん人ハ一とつらまらまら  
ともおとまますしとて吉斗と可廻も也

伊尹 九条師 朝息

石井定方 息 内府高藤 孫

③ 一條攝政納言は任給付朝成同く流りけるま同願  
放言あり攝政の任朝成ハ納言と流りては給く

まいてまの良久くあつて御漏一任付朝成大納言  
まらくま理運とまらまけりま攝政の流く世同斗か  
ま一任事の流ひ納言流り付放言まらとて大貴園  
岸進家心任まらとらりの流り入流まら朝成  
まらまらとて門とまらと車まらとて先筋と車まけ  
入るれおれく二門と成まらとらり生靈と成く攝政  
まらぬ一條攝政の子孫朝成の靈宅は入らとけり  
糸東洞院とまらとておれまらとて任承りける罪業の因  
おれまらと

堀川白兼通 女

三條院 女

早堀川 女 頭光 女

③ 頭光ハ白兼通ハ一條院の女おれとまらとておれく  
と根まらとて息靈と成て一夜の内と悉く白髪と成  
おれんおれとまらとてけりまらとて雲凌の思とまらとけり

る顔よ愛しけんよ恨いあつさるけり

大相国為尤息母教敬也

④ 舟橋氏シノハシの宰相の所才幹するありて兄の誠信マコトの君と誠て中納言よ成治ナガノよ誠信亦弟のうき成  
ちて指當けら恨よき守口傷く思治シノつとけりや七  
日ヒトくちよ恨死イハレよ死シつとけりやとさるて去死イハレけり  
う心やつらりけんマコト指マコトの死治ナガノ甲カサへ通トりて弟よこ  
らう半一帝王位トと姉イハレして去例すくかうす思よ  
くくイハレとさるさうわとめたり

之系内大臣公教ノの四子實綱中納言弟の君達實房  
實因マコトねと誠マコトとまこ

とらかりて誠信の目前よ思報の極と感せしめ治事  
ひマコトとさるくとも思也

⑤ 顕基中納言のつ存マコトの罪をくく御本の月とるや  
らまらりハ似治シノす能善知識の次とるめり御を  
宜マコトくねマコトとさる無量の事う是のともありす寛筆  
う雷マコトとねつと法和の茶月の法記経と思報よ回向よせ  
恨の深さ思也

朝個丹後守玉潤子

⑥ 法マコトに相マコトの啓明マコトよとられて後世と訪まけり願文よ  
悲マコト之亦悲莫マコト悲マコト於マコト先親  
とかなる前後相違の恨けよさるていつとさるく哀よ  
思とに淹マコトう恨の賦マコトよ平原よ人のかりひも暮草骨よ  
ましく庵マコトと枯木マコト魂マコトとわさひ氏生マコトつふいマコトとねりて天マコト道マコトと

よ編せんや僕もさう恨する人も心驚く事やます唯  
いさゝかの人の恨もあれと非を思ふ事あるこそ  
く無難に加へて唐帝の楊貴妃も別へ恨ハ長恨歌と  
云文名もあひくや白漢皇の李夫人よと云れ恨ハ  
いさゝかり恨もけん骨ハ化して雲と成りた此恨も  
くもく消る期ありんと樂府よかきよりのつと  
流くそやえん一凡妹背の中は恨あさくぬきありハ  
云川く一さく一雲一ふあくぬき言の元ハ更り  
さこの一思もすくろさうありありありぬかたり此恨の  
元の恨もすくろさうありありあり是倫も也  
着生死の業もまた本を解けぬ身の苦も此恨も  
あつむ類も今もとあはれ只傾城の色もあつむ事

希ふる

⑦ 抑人間此八苦の中ハ忍憎會苦と云ハ抱れう  
りさう也國王大臣もあれと云なき流りす況やそ  
の次下とや能く心も抱のうれぬ事一世人習ふし  
と思ひてあつむく忍むる人理と云ふ事  
す拙らる恨のあつむる心のもつたのまふおと  
りす司とのつれ入りの家と云ふ事此をわら類  
ありと共道心と云ふ事と通る物なりハ浮世の業  
能ひくけてさういづくありんかもハ可成善報  
減ち候さうも沙ハゆすにすてさうもぬ物な  
まハ恨い事も通るすは悔類も催して成ハと云  
せしむる事と云ハ或ハ高御粉川のこれよりと云

あつゆまわりのこと人まうつれなまうひがあれか  
うんよけとち中り思あぬう海まてまをん  
ろせ八遠の心くくくくくくくくくくくくくく  
急ゆりきりくくくくくくくくくくくくくく  
す西り平く

業ののゆふ身と心のゆふ心くくくくくくくくくく  
とありくくくくくくくくくくくくくく

逸字橋正通の身の沈めり事と極く異國の思えりおれ  
具年親王家の作文序書とけりくくくくくくくく  
とや思あん

鈴重親駒過三代而猶沉恨同伯鸞哥五噫而將去  
とくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

正通思ふくくくくくくくくくくくくくく  
とくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
とけりくくくくくくくくくくくくくく

大納言字通の息⑨伊通公義成の時大治五年十月六日の除目は義

曰人師頼後房長實孫栗宗棟宗俊師時後房等

中納言に任す是皆任次の上臈也といふ伊通其極よ  
きとす宰相右兵衛督中宮左大臣の言を辭て松柳毛  
車と大官西に川やして被とくくくくくくくく

の袴きく馬ののくくくくくくくくくくくく  
とハ官りのき後者くくくくくくくくくく  
きりけり前後房と中流入道大治のりくく  
雅智の公の子雅定

やうく

今年まともなけしきなりし持らりたりとみともねがはる

何れも思ふ所のくさあつたりみ川原千ねのともあれ

大治四年ヨリ長兼二年マシ四年目也

からとまれば此区所のくさく程なく長兼二年九月前幸

相より牛納言のあされよなり宇治土納言隆國兼牛納言

より土納言の成例とも共いなりく深進してち政

と居るとのありとけうきと是ハ世もとがめり人とも結

いしりりけりぬ也くぬきなりしとまれけり事なれ

とけうらあり類もひしりり申しち方ハ二條院瀆後

なり

あまも初昔のぬきとあつたりしと世を恨むとす

とあることわりとあつたりなり

第十可廣談才徳事

或人云けり共道この家よせればぬれハけり事也

とあり類もやうくよけりハ徳ハ必多き也中も

氏とけり者徳とありて氏とつる類も

道とありとら類徳とありて道よつる徳もあれし

氏とつるんくあ道よつるんくあ小はと是もたよ

とけりて何となくわえりともあり共けりあえ

とされた徳徳よけりりちりもさうらありぬらあ

遊ひとるよぬきも何事ともあつるんいさ流れ

けりて人目いしとくさぬてすくぬきよく

ありきたあやとさ徳ありよまをさふあり其

ふとあめと徳思ひてこのけりなき愈したのあり





菅三田息

③菅輔昭字多院此就人よ補して試のさふ浦  
死逆勸酒く言為と賦て輔昭としく席者  
とす嚴園の助成とくうひく院門とくうては  
なせしめす件此席の自謙句云

菅三田  
沂於李門之波二年朝恩未及

踏於蓬臺之雲十日夜飲已醉

とそかある人は是と書造とす父の文時々踏蓬臺  
と書一日と書下下拍を判てかそけりゆりゆり  
難しけり餘の事は祀業とつちる事は伊勢人  
まふ似あむりり

兼家公三男  
③清堂関白大井河とく遊覧の時持哥の和と合て

各堪能の人ととのせくまけりふは業と納言と作

らまてくまつりれのあまのくもまやふはなふれり  
此あまのくまつりれのくもまやふはなふれり

胡まてくまのふり定まれば業は綿ぬ人を移て  
ほいそれけりらつれのあまのくまつりれに  
そ心とらとせられし又詩のあま業く是れとの  
たをつらとせられし又あまのくまつりれに

此芥花山院格遺集を撰とせは所記業乃存之  
て可合被作けりとて就はすれはハ本の  
まふ入まけり又園駄流し所大井河道通の時  
之舟よ高たあつて

④柳氏初々信々又此人よわくくはらとたり白川院

西川よ行幸時詩哥管係れとのふと信くと共た

の今と今とのきこしけりよ経伝の道来ありて  
の外も流しなまありけりけり後とこもりまされて  
衆のさかりけりけり事ある人としてけりひまの  
さくやこののぬもまされよせまるといれりけり  
けりぬくけりけりけりありやくいん料とま祭  
きこしけりけりけりけり管経のあり家なく詩を  
と斬きこしけりけりけりこの舟と事といふまけり  
④後と衆流経者けりけりけりけり時経伝々序伏  
しきこしけりけりけり

沖つをせせよけりけりけりけりけりけりけり  
當れのありけりけりけりけりけりけりけりけり  
右とよのありけりけりけりけりけりけりけり

らけりけりけりけりけり沖つ白波此は古にれ大倉  
せん日和歌一雨派の沖けり色の歌中門の内は入と  
史生の響きつとまさんやと後撰云此作也何は歌  
全をとりけりけりけりけりけり今此歌けりけりけりけり  
て先任古にけりけりけりけり一の古納きとて尊者けり  
て南階より福ののりけりけりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
氣ももあり又自讃云躬恒家集歌多り中  
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
帽子ありけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
けりけり詩と繋けりけりけりけりけりけりけりけり  
人けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

そのまゝといふれり人の身まゝ一柱の御くまふ  
そのまゝといふれり人の上まゝすまゝの美才也故能れ  
りしは

⑤都京者竹生流のまゝといふれりしは此心すすこ

三十世身眼新盡

と云句と作と共末と案海流りまゝれ八靈天託宣  
と下しと

十二因縁心裏空

一句と云れ流あり同人羅城門と云と

氣雨林風抗新柳髪

と評しとるもれ八標上と云と

氷消浪洗舊岩鬘

と川もさるとり良香菅原相の事亦よく六の  
詩と自讚しとるもれ八下の句八鬼の洞なりと  
波作けり

目京風とある人のまゝと流城つと云と中より冠帯の  
對句と唱しとるもれ八下の句八人の化まるゆ  
の佳對と考ふ感ありしはして下の句八人の化まるゆ  
わと云と冠帯の句まゝとるもれ八下の句八人の化まるゆ  
竹生流といひしはけりしは又良香竹生流  
と云と三十世身眼新盡といふ句と作しといふと對  
句と云と下しとるもれ十二因縁心裏空といふの神は流  
なりといふといふと案海流りまゝれ八靈天託宣  
ゆたかぞりのまゝといふ

⑦世中よあいのちかたりて道人サ初りけるは落之徒  
右中平三親子  
家の前よあひつらまらひ數十騎打立てつらんす  
うらあまなりよ其中のさ人かあひさ人云龍山  
雲暗しつちりい此家まきういそて情あふさ  
とそ打さぬく人の夢をえくさうとけるときて其家中  
いあやれ下人よ初りまてつらなりけりとは白八法  
慎みれを將と辨治けり時の春れ文也

龍山雲暗李將軍之在家額水浪困祭征虜之未仕  
巨房 直衛四代次衛子  
⑧江都村安樂寺とて曲水宴行つれあふ自序と  
書其の一句よ云

荒女廟荒春竹深三掬之淚徐君墓古秋松懸三尺之霜  
⑨道八建保の江宮長貞宇坂之執使うして下向の時

安樂寺小詣り作文の庭をのへけり自序と書と  
つらけり

青雲入手遙持使節於百萬里之西  
玄風深心泣拜祖廟於十一代之後

此句と誦吟の間文人よつらねる祠院等涙をお  
ろくろり泣と定て沙網交をけん

⑩社園入道伊勢守實綱俗名相承 日野三位實成子伴ひて後園下をるける

小基初日久くくてもくく民の歎涙くくあはけりよ  
神の和弁よめそ泣物也試よよみく之語よあひさ也  
と園月頻よすあけきこハ

大河苗代あよせさうくをあまきさす神のく神  
とあるとそくく書く社月とくくくせをさる



中ありよ此娘美川くよと母のひさと抱くく執も  
あつすねさるにけとて岐方は成く母りやういつ  
らり思くふりすゆよあらとあつらよ家やう  
よ娘次津も教よ思ふもつらよとけへきよ思半なけ  
よ孫次つらうさそくさくくくくねく娘君があらえ  
ふりぬ道よらうくくくくくく

此はうさを中く何いけり木も心とくを知ん  
とよふさるもあれは母も神くく物もいつすくして下向  
すりよ七条赤本在れ多くと世中よ時りよ治助と人  
わうくくあもあもひくく物ねく此女とよらとて車よのせて  
やそくおの方くくくく娘次つらうくくあり

③ 和泉歌部、胃のくれくくくくくくは貴もく

まらとけらよ堂の形とく

物もくくはの堂もあ方よりあらんわらむくく  
とそあもれは社の内よりあひら思ふとてわく  
まらとけら

あくく山よまきまらとてあら港つせの山敷つら物もあひ  
そのあらくくあつとけら

④ 同或はうむすあくく或は内なる世ねくすたひもら  
まらとけらくく人らあもくくあもくくあもくく  
あくまらもれは和泉歌部側よまひくくくくく  
くくく注ありよ目とまらくくあけくあつらとけ  
くくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

とよきうきさうりし名をいふもれハ天井のうらあつひ  
てやあつんこおほゆりて思あつてあふ春と云てけり  
きて秋のあつてけりさうしめてふりて成るる

⑤ 丹波守巨衛子式人棟重光孫 江舉周和泉の住りて病重なりけりて住吉の

とある也を知りて其母亦深悔

かりて母をいひて命おしめてお別れをせしむ

とよきうきさうりし名をいふもれハ天井のうらあつひ

ふ白髪光緒をくみ勢を和らぐ病のふぬ

⑥ 堀川院中 ちの注言の女房小大進と云平よきうきさうりし待領門

院のゆれ一重をさうりしをいひてお節よりの祭

文書に新しきありふ三日しきよ津ありて折らぬ

きりたるハ守検非遠使是よきさる共やあつてあ

ゆへにゆけりて小大進ねりてゆへにあつてあ

中ねりてゆへに是也と三日のゆへにあつてあ

ねりてあつてあつてあつてあつてあつてあ

たつてあつてあつてあつてあつてあつてあ

非遠使とあつてあつてあつてあつてあつてあ

思ひいひてあつてあつてあつてあつてあ

とよきうきさうりし名をいふもれハ天井のうらあつひ

とよきうきさうりし名をいふもれハ天井のうらあつひ

とよきうきさうりし名をいふもれハ天井のうらあつひ

とよきうきさうりし名をいふもれハ天井のうらあつひ

とよきうきさうりし名をいふもれハ天井のうらあつひ

とよきうきさうりし名をいふもれハ天井のうらあつひ



形り此事のありきと見せしめられしを多岐の山まやの  
山馬より山の若どのせしむるせしむる被作されぬ地て  
兼てるりふ小大進ハ雨ちのくくと流くはたり市和  
よ紅のうすやうよ書より弁とみく走をぬてあら  
はしむいしむいあつぬさうよ多岐殿南殿の形よ  
後共より市和とるつとえさささよハ法師まひあつとこ  
あさきまきとて侍所門流れさききりけりけりあつ  
さきくゆふよまひてあさきりさきよハ作のあつふ弁  
よめさきせせりけりけりめさきさきゆき市小大進を  
あもれ共のりんとうとあさきハ心まのさきあ  
よあつしめさきゆけのあれとことてやとに和弁ね  
るあつハ筆流よけりけりさきとつとさきとてあ地さきこ  
うー目さきさぬ鬼津とてあさきとあつとてあ今の席よ  
あさきさきいられの類ゆりあ地の事あさきあれ  
あさきのさきハ事あつとさきとさきとあさき

獅子舞 安積氏云元史賀勝傳順帝一日  
獵還勝參乘伶人蒙采毳作獅子舞以迎駕  
輿象驚奔逸不可制勝投身當象前後至者  
斷鞞縱象乘輿乃安按宋宗慤製獅子形以  
破林邑象陣此兵略也伶人獅子舞則與此  
方所有無異乃知異邦亦有此戲也

大納言宗通子  
⑤成通ハ即曲ハ物さびつとさきりあつとれかさきり心り  
とさきん久しと頼ひとさきりさき駿者大おとさきり  
けりよ此人活よあつとさきりさきさきとさきさきと

やうあそこゝろふおちのねんくすけらゝやすまゝあそ  
よもほほあらしす八人おこらまゝくろりあんにんあけ  
とを年らくゆり男おまひりりりておんまな  
世のうゝもやゆらんこすあれいあやとまゝん  
と

葉師上元想然の衆病悉除りたれり一  
一經共身にありてとまらるる海をくろりす  
と七五中うゝひゆりけきハハのく海をゆりてく  
めそと人とおや一まひまらけりもゆるくくゆ  
しとくあそきあ〜とまらけりおこり時とてか  
らゝりもハ相あゝあ〜ゆりも事〜おゆりま  
ま

⑤津和原天皇を御川の巻て行幸して琴と川  
沙河津女是くゆりてあま〜ゆりて舞けり共曲五  
及び是と五節とあま〜豊明の節會とて年々  
不断とゆりて舞舞とハ舞津女とゆりゆり  
舞也り時のあ

しあ〜とあゆひすま〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜と  
とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜とあ〜と  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

⑥村と帝月あつと秋清涼殿のこのゆりゆり水牛れ  
角の撥とて玄象とゆりすま〜と只一和あつ〜と  
けりふ教のゆり者定より花あ〜孫麻〜病〜ゆり  
けりハ何若〜と回せゆ〜大廣れゆりゆり博士あ〜と





湯前を別高陵王と奉けり時、家敷大のゆきまひ  
ひきておひこころりけり。あつゝ、集りてきりおた  
踏とけり。とけり。と正資時、資おとけり。おとけり。おとけり  
板前より奉りし。ひきこめてきり。おとけり。おとけり  
さけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
ひそほく。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり

③妙音院大僧尼海國、おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり

たもた道の板ぬれ、いりてきり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり

④建仁の法天寺、おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり

⑤南都、おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり  
おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり。おとけり

けりていふにさうしき共前とありさけるは物のうめ  
く者のしけきこあやしく思くは舞家も若かれ  
と妻子親類りてるるいふつてさうとあれは家  
具して来るくやうくは物あつてひけるぬるは  
一人心りおあるなり 諸君云吾妻魔王宮も来て罪  
定まる一府一人の冥宮やう日の本の舞の師  
情をいふて還城樂と侍ぬさうは共男と名をさう  
しと名と造して舞と侍へてさうさくはさうあり  
かゝんとも共附者識して實は元就と名及の常  
樂會は舞侍とてさうさう思つるはさうさ  
さう思と侍りあてさう者共思くあさうさうあり  
さうさうさうさうさうは此舞と舞子も侍りさう

又共さうりさ子と上府はさうさうさうさうは此侍をり  
先祖は舞人の家も還城樂の面ありさうさうさう  
ありてさうさうさう重代はは侍りさうさうさうさう  
の宝物とてさうさうさうは五宮も此道と重くせさう  
りてさうさう

◎ 伶人 助元 府役 懈怠の事よりて元を府の下倉  
と名をうり此下倉は蛇蝎のすむあり物とて也と  
すさうさうは徳中さうりさうは蛇蝎のすむあり物と頭ハ  
祇園の仲子と名をうり眼ハさうさうさうさうさう  
りさうりさうさうさうさうさうさうさうさう  
助元 魂共れりさうさうさうさうさうさうさう  
城樂の儀と吹上蛇蝎ありさうさうさうさうさうさう



可移すを所と過つるは口楊事ハ教尔雅杖也云  
学生作らる文好し可くありけりと奏せさ  
りけりこそこの憑るふれれは政作もれハ理ハ根  
々々やくて飛人より人さ由作りたれけりと小倉倉  
人して觸造す小倉と為る子く通而と関わく若  
かりけり雅杖妙はす人さ極も移りけりと居守  
りて内苑司ハ作て其もそのひと改りせけるは書  
ける句ハ約吟九畢序也

望廻翔於蓬馮雨沢袂未逢恩控御於第山霜毛徒光

長門守長盛子

◎同字櫛直幹ハ氏都大補と望申けるハ自書  
て小邸道風ハ清書せさせりとの書覽せしむけりハ  
依久而事異難叙編顯代天而授官誠聽運命

非く述懐の詞と書すくせりハ依く此字ありけり  
けりハ人走と名思ひも其内袁統七俄中流尾幸  
せさせさひきりハ代々の世後物侘子時の簡玄象鈴  
廉以下りてまのときりハ清覽ハ直幹ハ文と取  
わたりやと以るるもれハ河の人ハハハハハハハハハ  
けり

兼家 九条殿号法興院殿

◎東三條関白兼家九月十三日の月ハ西とりれ東  
少流の念佛ハ系流をとりけりハ御打交とせりハ  
ちつりたりはハハハハ信民流々とめりてハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ  
暫まハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ  
詠せんすハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ



夜々打ち明しきるるけり類々くわをさうりたり流り  
書きたり亦在やうと流依よにけりもあやうとさき  
らこの人か朗詠せしれきりけりいり斗の心の中す  
すうりけん此句ハ勸學會の時掃念山林と賦する  
序也

念年於樂之尊二夜山月三圓光四句曲之會五朝洞六紀七欲八流九  
是八月十五夜事也九月十二夜ハ詠せしけりいりく定也  
但此佛の歌より取らばけりや古人の所作作  
而可信也

一條沅江時越前國ありとさうりけりと深田守藤原時  
共く流りけりいり堂殿ありとせられけりや四守とね  
ささるけりとお好結ありとすり文と女房はけりなりと

けり共句也

昔字を秋紅流爲市深自春朝蒼夫在眼

帝心一覺二しく佐三印四もまの五す六秋七れ八や九く一〇入一一せ一二流一三く  
少心一四芳一五も一六けり一七と一八い一九堂二〇殿二一の二二系二三流二四く二五圓二六守二七と二八政二九く三〇時三一を三二  
た三三き三四れ三五けり三六

◎後一條天皇以宇武士伴瓊斎實祭の中一を二撰  
取射らりよりと太神宮より流りて三奏四用五り六及  
間伏七後八を九り一〇隆一一綱一二宰相一三と一四筆一五と一六紙一七と一八定一九文二〇を二一  
書二二其二三句二四也

雜言飲羽之号未見首直之實

コカラマシラニル

とささるりく中將とゆわれく兼事を流りたり  
其時の系流中ねりいりいりいりいりいりいりいりいり

忠道 忠實 此子

③ 法性寺岡白少尉東法院領池田莊解と朝隆は執事  
とて御事なされり其状の中

非常輕微りと御威儀又成梁上と好遊

と書きたりを忠告して此解妙し田舎りの事ありす  
學生儒者好みの書きたりしを尋ねて作られたる  
宿木と被取ぬる智ハ秘苑として下と下と定也  
その間も江外記康貞と申者縁ありて池に  
と申けり縁と康貞と文融と申つれり此亦文  
章不付たり面目也

兵庫及仲正子

六孫王経基子

④ 頼政三後ハ多田滿仲と申す武藝其民と継ぐ  
和界の浦波三と申れり久しく大内の子孫と  
なりし中村村と申す其年とつけり事のをけり

免りゆふ

人志ぬち南のふちありてその日と申り  
と奏して罪赦ゆりされあり

利アサ補宗康子

三井寺覚讚僧正年高ありてを識とゆり  
さりけり然即し誦く

山川のありとて沈むる深き恨みの名を伝え  
多ね流きしりて河岡解とされたり

頭取法師綱の望をけり

うらまゝいする人の心とていふは  
かくよみて法橋とされり

法橋光興子利和と補忠之孫

信光法眼

三々三々の人々をばば小おはすは法の

とくありてけりて西園寺入道相國の御りくまの御りて  
く法衣の御りてけりて

但馬守家長栗田宮司今も寄山と云事と

主田山と云れきわのうす衣袖の帯ありてけり

とくありてわぶは一階とくありてけり

中納言頼朝の息

⑤別當入道惟方は二條院の御乳母子と世に重く

御えありてありて振舞ては白川院の御りてけり

己深りありてありて配ありてありてけり

けりて目く流され一人の御りてけり

御りてありてありてありてありて

此せも沈むてありてありてありてありて

とくありてありてありてありてありて

ありてありてありてありてありてありて

ありてありてありてありてありてありて

乳母七条院信隆の

後鳥羽院の御りてありてありてありてありて

と事より初物より入りてありてありてありて

また思ありてありてありてありてありて

此事を歎くありてありてありてありてありて

ありてありてありてありてありてありて

御事此事を奏聞せしめありてありてありてありて

長朝と云作てありてありてありてありて

ありてありてありてありてありてありて

ありてありてありてありてありてありて

天曆九年九月九日

大御院と云ありてありてありてありてありて

戦前子存時子兼補孫家式兄母孫守為信分

惟銀の如く集をるにけりを侍たる付てあやも  
ひけるよおられて非ともいさなりきれ門とて  
そめけり

市より木丸殿のあつたあはれをせぬ人あはれを  
とちえけりをはりりや女房流よりあれはゆえれ  
まけり

白赤大ある年春春徳度の身よひれくめくれ  
かからけりふれけり一りき家のまけりよ集をる  
今よりけりともあつた將軍よりあはれ

遠見人家庭便入の御貴殿と親睦  
と御けりふより又二年あつたあはれ威風凛々  
様為忠信の大隔ちとけりよ那の目よ顔白を

ちりを答あつたあはれ

老いそく雷の山とけりけり  
とよそとゆりゆりあはれゆりあはれゆりあはれ  
中せもゆりゆりあはれゆりあはれゆりあはれ  
今の使へすあつたあはれ  
こしたすともあつたあはれ

⑤後撰集云あつたあはれ  
わりのあはれゆりあはれ

はつめを徳もぬあはれ  
とゆりあはれゆりあはれ  
よりもなきとやあはれ

抑此年と承物流のあつたあはれ

すゝぬけるとぬえの童女れおこしむことを思ひけては  
ここのまゝらとてこゝを昔のようまみの神よつこそなる  
とてよめるとありしころもこゝは法隆寺のころつれら  
古来凡件抄と云物とありしころもこゝに女は子に  
とらとてこゝをあれは童男のころとぬの神よつこ  
てなるともよめると男とてこゝをぬとありしころの  
ちりくわとてなるとぬの不同のころもこゝに中務の重明  
親王と桂親王と号す宇多女五官と野男内親王と  
すすすの事とありしころもこゝに  
俗名中務サ浦定長  
寂蓮とす所よとの事とありしころもこゝに  
思のこゝに神と云とつこそとありしころもこゝに  
とありしころもこゝに

伊勢物部と二条屋とつこそとありしころもこゝに  
ふととありしころもこゝに  
物とありしころもこゝに  
すこゝとありしころもこゝに  
よたり物とありしころもこゝに

いほいほとありしころもこゝに  
此界とありしころもこゝに  
河内重如と山次郎判官代と号す其おしやこゝの  
わりおしやとありしころもこゝに  
とありしころもこゝに

人ほとありしころもこゝに  
女とありしころもこゝに



宇治入道形はあつひけるうれしきことなり  
物と頭押のけしきつねなるけきハよきて  
送あり

おとらふつゝさめりかうねい人し趣ふ名を秘せ  
入道殿まうせしき秀平の返事ありてゆけを  
つゝいられける

中院内大臣宗雅息

宗家大納言とて津楽備馬楽うらひとやうく  
きむろ人ありしきや方に後白河法皇の女房を仇  
ける宗後中將うらむとてなされしよ成くを  
けりしけきハ

あふ半のまこと命とてなすいあつゝさめりか  
とらふしやうきもあれは返りぬくて申とつりて

つゝいられける年一りなるなり

公徳 實之之息

近ハ徳大寺れたのわく行まうせていふも  
ゆゑ仲子のことをゆきける系統の抱とありて  
すやうとありて此平とてなすあけぬとてなす  
へりしける

まひつゝいられける君とてなすいあつゝ  
女房此抱いあつゝいれとて此平とてなす  
わきまをかりけるいれとて色深しこれと  
吾と人としてつりてあつゝいれとてなす  
良選と宗より伊見御理あまのく物とひるやうとて  
りけり

人あやむすつゝいられける物とてなすいあつゝ  
松池とてなす

ふ河智定奉心けり海よりけるありてねく成りたれし  
世とま物と思入りてけりよとるのほくまありて  
ゆきまの女のゆきまの道とけり鏡とらとり来  
りありとねてるるよははらうとけり

あふれしとるよあまのまのりて  
是とるりて海とまらす鏡とらとりて  
りれたあり道心といふくまありて  
お家のら寂照と人て入唐ありて  
圓通大師といふけり清涼山の慧  
けり付詩と作れり

坐次道總孤雲と聖象来迎藤日新

但此待保流作れりてとるぬく或説云此人唐

この嫁眉少寂照とまける後印也仰と法門  
の義と論して永く務れりて思て入滅と  
けり其概よりて法生と遂そ日辛と生れり  
あり也入唐ありてあれは嫁眉少の寂照  
と不遠より人帝とけりてとるぬく  
とをける付より顔と光ありてとるぬく  
無縁より法師の人けりてとるぬく  
とる人ハすまははらう西向あり人ハ付と物と  
とせあれし

あふれしとるよあまのまのりて  
とるよありてけり其概よりて  
とるぬくとるぬく  
とるぬく



似るれも藝能につけて略とつけ賞とふひり  
物おと敷とわ知来りあや一のあつのめさひらつ  
まてゝ即曲よすられ和弁と好む書よる人まをて  
なとて撰集とけらす書ありあまの書あり小  
亭あ帝の春院とて遊をけりよるりひと云こ  
とと人よませられけりあまひらつあまの書  
集けりま中よるりひとて色よるりひのを  
とらりま丹波の玉削り女よ白女とせり帝の舟  
よるのせと玉削り詩歌よるりひとて若也夫  
ひすあめれと此弁とよむてゆりひ實とあし  
りすひと中と作りりひとてまて  
ありやるといひま書あつて夜けりゆりま書あ

此時帝のあめれとけりゆりひと一重と  
ソセちりま其外上達和伊位おまぬぬとて  
あれと二間とてつとあまの書ありとけり  
同女深實つとてつとけり対山橋とて別格  
けり存とて

命をよるりひと物ありひとてゆりひと  
とまるとけりゆりひと集りひとてゆりひと肥後園の遊  
君は垣姫の法撰集よ入津崎遊女宮本、法撰  
遺集とけらす書卷の傀儡名成、詞歌集とあは  
江に遊女抄の新和と好作ありとてゆりひと書生  
忠孝八金人形とて今好撰考とつとてゆりひと山田法  
竹ハ非人よとて同集とけらす書やまひとてなり

あれハ不難

神崎君と称する男は侍ひくは一人あり  
海賊ありしとありし不毛をひてあきんとあけり付

彼等何しよあひのらん男をひとあられ

とハ西方抄本のうさのちひと念す也

とせひくうさひて入れより其時西方の楽の色

あきそあやとて雲を映しけり心あきける

まさなるハ今れをうさひと社生と遂てけり解脱

を何をもうけし品心のむくさよ付て信をおさす

より也

若三位は彼果のききとて道行をけりた善知識の  
人よひよやうきとされハ彼ハあきす其因事也とハ

うさ思ふは時詩と一首作しけり其のまよは

しけり月とて抄本の莊嚴心ようひ思ふは聖衆の来

迎ふ朝をみけり其機根とてうさひと人まかく

すめりけり也

猫間中御言光隆子

⑤ 道ハ生しの二作家理ハ字とて天皇守とて彼等

ちり付七首の房をうさて廻向せしむけり除彼百念

とて其志むきとてうさたり其也一首

契あまハ明あいの里とてうさの入りとあき

齊自上人とて一人の常此古所二首と目新也

評しと性生れ素懐と遂みけりも其理も遂とてま

とてうさりけり三人の家とて生をうさり養也り藤原

つと字騰り物とつとてあけり行事とてうさひなり





細言とく流をうけしきありかたきん

郭公多きも雪井あらるるね

相政とらありす

弓をるる月のしりまうせく

と身をとりけりしうらりけりまうりおてけり

昔養由雲外射鷹今相政雨牛得鶴

とも被感ける相政ひきあけ外へゆ夫とらと果し

てゆらりしけりしとゆら人の問われりしわえりしを

うら申行ひきりし人としりんうらゆりしをこ

そしり

僧徒は勤しんふ事は修業一院地羅尼行者法華

持者等也古有後世の徳因也といふ云云請ふ所のむく

日ハ七生れ徳在まへ 天生震且ハまて瓜まの 而細

とらそとも江法侍教意覚智證の冥天師と娘もりん

養薩和尚号と蒙りし類智人檀者の名とあらはす

撰録其證多うれ共而これ靈験行徳らの註し

るし中々せくと振出すよふ及後法の徳神威の

例相とよかありしものたうらあり年とせを撰下

⑤材と四時之條中細言朝意の初まきあひりり第

朝成始く并敵ゆりて少教教は世すまといふ事を

沙せんする共其徳くくくけ也りり徳をそく

也せむくまを流くこれハ内書もひくそり

此をりし多し形も思ふ美徳もくそしけり

⑥白河院は後の時野行華と云事もく徳淑行よ

おりの付て放鷹樂とす人々を管必三人と云ふは律  
惟孝の外は此樂を習侍り者ありけりは御も升平  
の次官ありしひのよと云管住者と云く惟孝と云は  
へき也作をきれはわきのの管束して樂人の加り  
まいたるのうき西月ありたりは百は楽いしき年  
なりをれは舞人も物持ともをうりければ五人  
光孝高孝則孝成兼経遠と二人きうはらと云れは  
ら孝あり子の未童とて年十はありたりして死人不  
うて後より男よりうて加りければり時の人西月あり  
そ中けりわきをきしき年ふありひのきせりはもの  
うもあつぬと管よりとてひききればらうき年  
と云けりやと云大井川は舟樂の時管を川の側より

へきえりうきと云れは能成は惟孝管と云く鶴首は  
管吹きとてえ樂とせ守人は是と云ひけるはうき  
共れとてと云けるは此西月持の管をきりけるは  
と云のゆ會ふは此門右大臣席題と云くはけるは  
其詞云

境近都城故無車馬之煩  
跡經山野故有雜兎之遊

と云わきと云る牙と云くは管をける中より御製うけ  
まをらとける

大井河あり流と云るは流と云く流のありは樂と云る  
通後中納言拾遺と云るは流にける耐入と云けるは

⑤堀川院は時同行年と云るは白河院より在流に

多財の山門右府のくく人作くく鹿徒を和歌  
席のくく書く今人此はあり

瑤池周穆之昔策駿馬而無所休  
汾河漢武之秋携佳人而不能忘

此の難く書くくくくく天皇又申す世経有れ凡  
府のくく独くく世経ける此句も同席也是と抑く  
國成府のくく世今くくく府和歌席解あくす  
詩席のくくくくくくくく我詩席と不可書我和歌  
才学と此時くくくくくくくくくくくく  
仲民の経信息  
元是細く年をけて杯脚成て下されける時曰河  
院年高く形くく遠くく心海くくくくくく  
以已に細年形くく誰くくくくくくくくくくく

事也くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
共歌くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
拂くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
法也くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
已とやん年くくくくくくくくくくくくくくくく  
の務きくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
好とくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
十二くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
象形くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
そのの胎也くくくくくくくくくくくくくくくく  
けくく年をけては元成くくくくくくくくくくく

後白河院子

此所の事をいふにまげきとも巻所てはなかりもれハと云ふ  
とて高きをりて新くゆりけり此尾法如房とて表  
りりける時を心とて止観とまん志をて歩けり  
こめお童一人と果して大衆の良仁體のりてけり  
おひよりの時或時さうくのやうに未迎院(まむつゐん)  
けり例時の程を此堂の局に入て例時をてあひん  
とまけるゆりて女房四年の思作添く字同の志をより  
て身とあひしてさう常の訪りて志をあひれを教  
治事いふれもれも程のゆりてあひりてさあやま終  
りんすもんもあひりていひりてさう頼りてさうんり  
さういりて清事いといひりてさういりてさういり  
ゆりて例時をて清事とけりあひりてさういりてさういり

中よ思もを治事一字同の思心さうりてさういりて  
といふれけりて治事とてけりけりてさういりてさういり  
してはわいりてさういり

⑩十月より一月ありてけり秋任信とて家とて家後左府後家子

少政長親に院禪慶禪長慶楽人之四人宰相六時羅寺別當

中約権綱管経者といひりてゆりてさういりてさういり  
か約後のをて名車とて業とて五節命師世とて省とて  
さういりて院の家のゆりてさういりて業の字とて入とてさういり  
らとて板屋とてあひりてさういりて物のあひりてさういり  
月表とてすの月とてさういりてさういりてさういり  
かてさういりてさういりてさういりてさういり  
秋風樂之及藤合とてけりてさういりてさういり



五帖まじりしけるは清くまぬ人形にせり修行的何  
事をもすねてしるまぬれは世目のかたむしりけれ  
りそこころひい人をも清くしと神とあかりたりし澄  
細俊のまゝまゝと舞けるは楽道とて流禪一廣禪  
師の調子を以て事後とありしは公琴とて経信の  
長俊は已とて人々清くしせむと樂の時のハゆれ  
まるとありし修行的もあれは日かたむしりまてや  
すこのありしハ五節の命婦とて藤景敵の女房の女房  
形とありしすまゝのまゝと朝夕琴とてとて事たりと  
ありしそのつらきまゝとわさたりしすまゝとまゝとて海と  
ゆきす法をんをけり

④天保二年八月十日余の法依兄の御言野宮よりゆか

雅定大相國雅實の子輔仁親の孫

けりし群れも遠く成ぬとて中山門衣衣に範圍内は  
能くうらまへ人の御もま青くまをけり秋より初月  
のくまはれとてなすくわとてまもやれぬまも  
一女房筆と凡書やとてかき合はくますと川の以  
初まもまりし遠く成ぬ仔細まで誰う思ひとてす人々  
お礼をりし遊ハハとて心とてまもまれはまことして  
とておまは儀馬樂とてうらまは内は法色にてまその内  
此筆ののまもまりし遠く成ぬまもまもまもまも  
ねとてくしけるは内は法色にてまその内  
まもまもまもまもまもまもまもまもまもまも  
まもまもまもまもまもまもまもまもまもまも  
まもまもまもまもまもまもまもまもまもまも

④唐國の衛靈公とて人番の國の川道に漢水とて

所へやうしをりしけりし秋実のやうにさしひゆ法華梵  
のしるあまのわし水の底に琴をひき音をゆき消え  
人とあまの此色と琴はあまのうしに消え音平云の  
りくしあまのうしに消え音平云のうしに消え  
うしに消え音平云のうしに消え音平云のうしに消え  
用く是は七國の色也音平云のうしに消え音平云の  
樂也武王討て討て時師延此水に沈むるなりしと  
故水よりけ色とあまのうしに消え音平云のうしに消え  
部平年充終つてあまのうしに消え音平云のうしに消え  
可然しき音平云のうしに消え音平云のうしに消え  
らんしたる用者消滅とあまのうしに消え音平云のうしに消え  
十六部来てしとひりけ頭とあまのうしに消え音平云のうしに消え

あまのうしに消え音平云のうしに消え

④唐玄宗の帝年八月とあまのうしに消え音平云のうしに消え  
れしとあまのうしに消え音平云のうしに消え音平云のうしに消え  
秋君月とあまのうしに消え音平云のうしに消え音平云のうしに消え  
しとあまのうしに消え音平云のうしに消え音平云のうしに消え  
時とあまのうしに消え音平云のうしに消え音平云のうしに消え  
とあまのうしに消え音平云のうしに消え音平云のうしに消え  
先とあまのうしに消え音平云のうしに消え音平云のうしに消え  
月平とあまのうしに消え音平云のうしに消え音平云のうしに消え  
上とあまのうしに消え音平云のうしに消え音平云のうしに消え  
うしに消え音平云のうしに消え音平云のうしに消え  
す彼とあまのうしに消え音平云のうしに消え音平云のうしに消え

りむとらうきと目もあそしねすむのすれとあけ  
く一人のありし走とるすへく物の音舞のすし  
不のまねまても心もなれりすおのえもくらぬくお  
えれけらとねりりかし舞をよんそすし  
内終より帝此曲と心しりくせよそめ終り盤  
涉調の色なり霞裳羽衣とすねりし走なり中  
らりしとえ終りよりて始終もねり舞也との  
但此半おのつれしち目録も霞裳羽衣ハ  
壹載朝の樂也本のあとし壹載深羅門とさけり  
同帝の時天家年中とのあしひりて霞裳羽衣  
と名く能くても

④同帝月の夜管吹けり共色龍丸鳴りしす

術者是とせし龍の注うと忍く心し龍の色とむ  
符と作し走瓜封しとらり昔時帝傍よりす  
くといさうせしとん伏終りす宮中さしとて歌  
半せよびんそと天下の終りしり走と彼術者も  
きびて歌術のありしある事とさしとて符と作  
てけしハ帝本のあしとて成終りしり走よりし  
さらめ終りし半とらとけり

⑤孟嘗君とらりしとあしとらり物の象とらりしり  
雍門と云人より終り琴と月笑人涙とあしと  
ま半りし君と云雍門とて琴と月笑人涙とら  
んととてひせけりし先世中の無常と云はけり  
りしあしとら朝とらと今とてしりしその色とら

ろく、漢州とあけり、豪士賤席、法士衛、書る

落葉侯微風、吹、墮、風力蓋寡

孟嘗遭、雍門、而泣、琴曲已末

又橋在列、お家の後、友、と、る、席、代、く、孟嘗君、多、樂、猶、泣、雍門、之、微、琴、ぞ、書、る、是、也

秦穆公の女、嬴、玉、は、ま、く、ひ、れ、く、簫、と、也、周、靈、王、太

子、王、喬、は、好、く、笛、と、吹、或、は、風、は、竹、ひ、或、は、鶴、は、竹、を、

あ、ま、り、と、竹、を、吹、と、竹、を、ま、り、す、人、く、糸、竹、の、妙

なり、と、糸、竹、世、に、あ、ひ、佛、事、と、竹、す、と、ま、り、瑶、琴、次

世、音、と、云、半、と、以、言、作

雲、調、黃、德、軒、兵、遠、風、奏、南、薰、舜、道、興

唐、高、宗、は、辰、則、天、皇、の、書、は、つ、り、や

皇、禹、開、泉、臺、之、聲、遂、登、仙、錄

帝、軒、張、洞、庭、之、樂、早、叶、真、源

わ、く、ま、ハ、音、樂、と、ハ、仙、家、人、中、も、歌、く、佛、土、天、と、も、是、と

ま、ま、り、す、と、竹、を、吹、と、竹、を、ま、り、す、此、ハ、管、弦、の、徳、と、あ、り、す

○行、成、ハ、道、風、ハ、竹、と、絶、て、り、と、ま、り、能、書、竹、を、ま、り、す

彫、人、の、は、彫、と、も、廟、合、と、も、半、を、け、り、人、と、珠、玉、と、も、

了、金、銀、と、も、う、ま、り、家、と、も、ま、り、と、ま、り、あ、り、け、り、故

心、ハ、く、あ、り、く、ぬ、る、と、も、り、細、り、の、ま、け、と、も、ま、り、あ、り、く、

ま、り、と、も、樂、府、の、要、文、と、真、草、ハ、打、も、せ、く、可、く、書、く、お

え、れ、と、も、あ、り、と、も、り、く、ゆ、ん、と、も、是、と、も、り、ま、り、と

行、成、と、も、り、と、も、り、此、文、札、と、も、り、け、り、後、の、孫、ハ、柳、牛、納

言、伊、房、と、も、り、け、り、け、り、け、り、ま、り、書、く、と、も、り、春、日

人の神の出現よりくすつるに神經藏と云願と一  
抜かきく置かひきるとけきも品とちたき經藏と  
あけまにあのやうあんとくまをりけるゆゑに神も  
うせ給ひて後述の年へくたふ品の介ふ心家より此  
神一切修と安罪一まのせられける耐難う願と  
く書つてく沙汰をけるは此神の子孫の中らにかり  
事をもく故神なきをける願をもくえりあされける  
とくくとききりく神意ふけ給たまをける事やん  
こも給く是ゆり首領理々大貳任りてくつあられ  
けるたをく作縁因之持明神の託宣らとく故社の願と  
かきまをりけるもりてをうりける

④成通の年法鞠とゆき給たり書法やうりけんあ

このの表まらけ給からこの柳の枝あつてんてん  
くもこのゆひきり小翌年十二斗まき喜色の廣装  
束しといふくうのくけりてをある何事とも好む  
と給く底と扱めくおれのありとあつてすくを  
うそせまわけまかからきめいといふあき  
く學者の牛毛のこく得者、縣角のこく太  
宰大貳資通ハ琵琶よらとけりて是よ心を  
入る事人の物まてあけりも指主事けりけるこ  
と給る念珠もせす毎日持佛堂よ入る佛前とく江巴  
を引く人よ扱とくせく是と廻向一なるとけりよ  
く心よあめらけりけるあられた帝より玄象と給る  
引けるよいあへんるもあれた濟政之位是とけり



青とらめと身とくふけありはる或人節と胡  
老子と云樂と吹合なきけりよらと幸とあてけり  
ひらとまお小細平と云細曲と吹んとすけりひとあ  
てあてとまおけり世の福ありとて或人けりさ  
根の底よひ印との節吹とくさり不えやせしり  
是ハ管絃の道とよくあがりて不知りけり可也す人  
とて節せぬとすけりたさり幸とあてけり事也

大御言後賢子 高明弥

① 醍醐乃大僧正法巴の二曲と云けりもの老法師の引とく  
さうせけりたさあすすけりけり世にすけりよらと  
つとまうとんと法よいそれききとさけり貴と人の  
く福んとけり池に流る水とけり思とありけり曲始と

こころとく是とけり僧正とくく笑とありけり  
てあそれ花園とく消とく目とく法師の根樂のあ  
まあとくこのとくけりけりけりけりけりけりその曲  
とそけりけりぬとくけりけりけりけりけりけりけり  
くそけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
まらとく玉環と良玉とまらとまらとけりけりけり  
其故とくけり結禱と王良薬とあけりけりけり同いけり  
らとあひもれいけりけり秘曲とけりけり實とけりけり  
まらよいけりけりけりけりけりけり唐伏僧正の理窟真言  
此ひまらとけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
寛朝敦實親王の子

② 醍醐の極會と童童舞ありけりけり年とけりけり深連と  
云僧共討りけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

綿きくみくけりと言流の宗願あさるんそそ思あまらけ  
るやあくる日せねるおれいそふあつた

昨日のすすこの池に祀ねれあまのこひわくを思  
せ將ふた

あまのこひすすこの池に祀ねれ祀ねるまきとねん  
とふなり河をさるるをりつ

中流傍心見物定遍 九馬頭顯定子ままひけり是とぞく

思あめて回入道右府の對面の流に此奉と詔が流や  
ささくそをえしゆりまあれ入道殿并ハおれ  
させ流り一ねこの流けりところまきさるりハねりそをり  
まうり宗願あまをつりゆり

まねふり一そ祀ねれくともあまのせねん

くまうりまや一そねれまね

とびくくゆり一かろ流けりまきくわさくおり  
おれくたれこまきさるりのいさ佛のねん一りまあ流  
けり奉たまきハ忠流けりそんすりねくおり一けり  
和界の道ハ顯密和法の碩徳あまよりけりとり中

くいこまき一そ一圓傍心ねた首の遍照との免忠法性寺

ねまハ似流りまきけり九高き流り心のひん方敵志通山子

付て能ハしつまもま一そ也女社の人ハおれまきらまら  
かりね一それまや布袋和尚の十無量とくま流  
る中よ文武右衛門守無量とあま和尙ハ流初の化  
作ねり

⑤ 押入 彼和界 管法流をさるる大才幹の思ふ風



月のうけぬまハ様一あかつくくまうくくえぬ  
唐太宗の臣王珪申云人臣覚学業おられハ心憤然也  
その人其昔の云ハ臣の振舞とあつす豈たその任と  
目ささうんやと云ゆハ獲素ハりくとさうと牒と爲  
して学ハ董生ハ帷とをれて外とをすして勅め  
けり又太宗ハ貞觀二年ハ始て孔子廟堂とをて  
周公旦と孔子とと先聖として顔回と先師とをて  
是文とありて一をまらゆ也然則史書全経とも  
学ハしるて朝礼翰常ともきく形とを舊託とく  
かすすおきれと不知して君道ともかきハ徳大  
せん奉一實の必要也但又次さうの人ハさせりす意ハ  
たうすた心おさるのさうくく世ハあり道とさうて

第一の終也さうくくの意能もあつ心とせこのくこの  
上の事也されハ相伝とも云書者相告と云くとさう  
ハ但貪福とありありとあり

⑤九大臣 師尹息小一糸兼時子右將濟時人の云代ハありとて宗綱宮内

々師綱と云人ありけり白川院ハはけりかせり月幹  
とありありあれ共偏ハまをさうして私とありとてぬ  
忠臣たりとよとをくあつりれけりまありとてやと  
けん陰裏ちとさされハあれハ後園とてて検注とけり  
ひありと信史の記とて大原日季春と云者是を妨  
けりと國日宣言と帯とてとて人く逐んとすりゆ  
と季春とせとさうんとありと誠と兵とあり同命  
歎とてと國日方と人ありと打とてとと國日大

よりのとれし事ゆを在國日基衛よふまたり  
此輩がしるしをせしむるに國日のこれ即ち  
まけくしてしるしひすくしるしを思ひたりこれ基衛  
さるしるし季春とよひしりすくしるしを思ひたり  
之命よふしるし宣言とすくしるし一夫ハ村んぬ此上ハ  
りしるし透劫のこれしるしありす季春う頭と切く  
くやし國日の心ハあつしるししるしを思ひたりす  
くしるし季春う一向とすくしるし切く身とやとく  
くしるし一くしるし實よ此外ハ平しるし一くし力  
形く急しるし難しるし國日のしるし申けるハ例を  
換注とすしるし季春う一のやとすくしるし計を  
ゆんつれしるししるしの振籍お来本ヤとすあまありあり

こしるし思ひしるし基衛つゆ不知及ゆれハ早換見を  
ゆしるし季春う頭と切くしるししるししるししるし  
はしるし是とありし季春代しるししるししるししるし  
きりし人下知しるししるししるししるししるししるし  
幸せらしるししるししるししるししるししるししるし  
て部妻如とすしるししるししるししるししるししるし  
就法羽給布やしの賊物とりしるししるししるししるし  
しるし季春う余と乞請しるししるししるししるししるし  
妻女目代とすしるししるししるし季春うしるししるししるし  
やとと調とつくしるししるししるししるししるししるし  
代執しるし國司大しるし版とくしるし季春國民のしるししるし  
しるしの御事とすしるししるししるししるししるししるし

つとく其科すては殊なふもる賊をなせはとて  
めゆるらん事君のせなれん其忠を多く人の浅又  
いふとくうは事更くすうすもといふれけり者  
殷討の西伯とてうんまをけりは天賦國長のより  
吾馬山下室をとりてゆりより是はこれより  
けりけきは其妻中よりてゆりより其後檢非違使所  
書せと實検使は指遣りすよりて基勸力不及ぬ  
くく季表并子息金身亦五人を頸と切てたりけり  
了そ國司あつまるらん國の者大にけりは季春う命と  
卿んふあふ國司は賜所の物一萬ある金とささして  
多の賊也強當國の一任の土貢も務せたり是と見  
入給りすゆりもくゆりすて遂ふとてとまはる

國司の憲法をくるとり知るとゆりけりあつり  
けきは國併せむとて随ひて思ふゆり行ひむとて  
務成應前々の國司よりてこりけりあつりゆり  
君すれりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
孟嘗君重とてゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
其辰幸ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
たりこりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
あつりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
す道王の心をゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
あつりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
家衛武衛とてゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

の館の中よまをれく江の物舎とあゆむて区あけり  
と御ふらうとさうちひはかゝる是皆部あつ物也つそ  
うく流りりよ不反とまける實りや孝まう間の事  
徒りあれは一の物きま本をけりて國目師總被下  
時山林房是遊と云猿樂依よりさうり平八南都の志  
傳りてまけるとて武勇と事とさうりて身よまける  
さうりり合紙の日家と是とまのさうりけれは物具と  
けあさうりよ孝春うつわののすまうりてみくつと一夫  
といぬえよ教とあけてはは少よ匠入まうり事とさ  
つれまうりゆまよけりて國目是と嘲て山林房の是遊  
とあまく先津房の是うりてまける人々あひ  
りり是とさうり惠心僧都の徒生要作あま人の定相傳

諭を以て陣の内の軍の叙は澄とさうりて水石の月お  
波の動靜も水遊と書流つらとて理をわつとけま  
思わぬもぬき被傳とさうりよまぬらうりさうりけん  
とまてい思ひらうりけん一柳孝ま國民らうり  
り國目と射を奉罪科流と遠初の者也あま  
ゆりさうりこれをもれは國目お清廉まうりて章  
條のさうりり也

⑤朝成は捨非遠使別當に付中細言と新説の同衣  
法水子消家強監百人頭と切者と共切骨よりり  
てと度岡一輝任す人さ由りてさ省とあめされ節  
れは律もま吾津教生と禁断一放生と宗とま  
あまうりさうり此也と可卜哉とさうり朝成重とま教生





甚しき事なりん心地もかくやまけんともん白河の人  
ししとこのふりふりけりて願途はあましく  
川の必軍ありりきりの也人の罪悪りつと事  
罪を知りてつらつら嗚呼のものもわらん  
思ひもせしめゆめもきける誠よふとく  
事ありて事ありたり又賞ありん事あり  
あふらめりてせん終りて

美平の江平将門東國とて誅及こし  
常陸様平貞盛下野押領使藤原秀郷等を  
川よりて波にけきしをけしを議民証忠  
文と大ぬ軍として合衆刑於少輔仲節と副将  
軍として下されけりといまも下つぬさき  
将門

おれりけし道もつらき事なりて貞盛秀郷ホ  
り勸賞と被りて忠文も同く象よりり  
けきし陣の定をり共付下野宮殿ハ一の  
疑し事とハおこされし文もして  
して事あんがけり九條殿ハ次のた  
忠文事り持しん刑の敷しハ行はれ賞の  
疑し事ゆりせしと曲禮の文とけり  
りせられたるの識はけりて  
忠文共也何畏りて富家の心とハ眷  
九條殿もりけり代り  
人共也何畏りて下野宮殿とハ  
子孫

夫のんと惣夫のれより又大に公資大外記と可  
しきり付金藏をて軒は守りてし中諸郷定め  
りしきけりよはゆりては竟りて云公資ハ相換と懐  
抱しと秀哥案せんやとて公事と願如く人く日  
らりれり共細よとて申意と遂す度く加礼の事  
けりよや相換ハ公衆流山付の一品官は女房に在り侍  
従也公資相換守り付の事とすりてらとて共号の  
て夫婦をて争りてはけり

⑤ 劫解由相公有岡郷よりとけり法天豊前守人具  
あて筑紫よりけり付天候の病と交て死にけれ  
る國泰山度居の祭と法の如心と至りて祈奉けり  
之付斗ありて生返りて云家楠魔王宮にたまて

川よりみ察りて郷食とそをへきりてはて川を  
すへて定わりて冥宿一人輔道とハ雖放逐遣有  
國とハ可放れ共放りての者ありて去るを  
川と共共科非可をて入る悪き人國  
よりありて其たの者たを國の場とて孝養心  
不堪此祭とつとめをてんててててててて  
着座の人く是は同じやとてと放逐する也と云  
けり彼彼因威果の公衆改革の中にもつて  
事よけり猶冥宿也次人るとや物も貴と  
てすり刑とてをてて悪態とてせん事定め  
てとハ夫意の違りて人法よふんとのとや  
作てあてこのこの祭のよとてつて者々の



物原と集めんやうと長男はゆめくさつて若くはくらく  
けきしよふ不埋まぬ名をうりともありともひりあ  
られさよねさうすそふ世のあつたあまひはけ  
りともくい川う所のよふあつたあまひは夢也幻也  
東人まて不物言とやせんれとやせん舊友とられて  
残すこれ一故文選とて文よあつてと行なれぬ  
水滴さうして月ふさうりともありともけし埋なき  
つひねくうりとり世中とや名りよ瀬川岩せの  
浪の速く流れてとやまうりともありともけし埋なき  
哥しともなりまてとやまうりともありともけし埋なき  
よふ又水は返る年が一流年は流ても作法文よ  
こ人の命不停過於山水ともやらんあつたあまひ

とてあまひとくさつて若くはくらく  
よふ又水は返る年が一流年は流ても作法文よ  
こ人の命不停過於山水ともやらんあつたあまひ



